

一栄の 異見 私見



のように自分の好きな映画や音楽を選択して見たり聴いたりすることになるのではないか。

ICTの進化はめざましい。囲碁や将棋、チェスの世界でも名人がラスがICTに敗北を喫するものばかりで、対戦を重ねるとICTは強さを増しているようだ。

こうした娯楽の世界にとどまらず、産業界でも農業を含めてICTの導入は盛んである。先般の新聞ではコンビニでもICT化によつていずれは売り場にはいなくなるということが報道されていた。既にICTを活用してのロボット化は著しいが、先端の動きを象徴するのが車の自動運転である。経済産業省の計画では2020年に限定地域で、2025年には現行レベル4（ドライバーはまったく運転に関与しない状態）の完全自動運転を目標とすることになっているが、さらに前倒される計画が実現しかねない勢いだとも言われている。

車の自動運転が現実味を帯びつつある中で、早速噴出しているのがタクシードライバーの失業への懸念である。乗客が行先の情報を入力し、車を勝手に目的地まで連れて行ってくれば、決済はカードをさして終わり。運転手と語り代りに、飛行機

ICTも使い次第であるとはいえ、その進展はこれまでの便利さとは異なる。あるいはいつでも必要な情報を入手できるというレベルを超えて、人間の感性そのものを奪いつつあると同時に、失業問題をはじめ人間の存

軽視は許されない “体に刻まれた歴史”

在そのものを脅かし始めるように感じられなければならない。こそで連想されるのがチャップリンの映画『モダン・タイムス』である。

1936年の作品であるが、機械化の大々的な導入によつて人間はその歯車になつての仕事ばかりに取り囲まれ、機械的で一律的、分業的な労働を強制的にされることによつて労働の尊厳が奪われていくことを、類例『タイロニー』と笑いで風刺している。このチャップ

リンが皮肉たつぷりに風刺した世界がもたらした危機は、ICTによつてより深刻にかつ仕事にとどまらず全領域で進行しつつある。そのスピードはますます、人間の許容能力を超えた進展によつて人間のためのICT化が、逆にICTに人間が従属化し、拳は人間が一番のお荷物、厄介な存在になりつつあるように感じるのは筆者一人ではあるまい。

ところで解剖学者の三木成夫をご存知だろうか。同じ解剖学者である養老高司の先輩にあたるが、三木は人間の胎児の顔貌の変化を踏まえて「胎児は、受胎の日から指折り数えて30日を過ぎてから僅か1週間であるの1億年を費やした脊椎動物の上陸譚を夢のどくろに再現する」と語っている。すなわち人間の体は魚であった時代の名残をたくさん抱えているのであり、「ヒトの体には、進化の5億年以上の歴史が、その体に刻まれている。つまりからだの声に耳をすますことは、5億年の『ほろかな思い出』の声を聞くことであり、三木はそれを『心』の世界の本質と考えた（布施英利）

ICT化がすすむほどに、自然の中で時間を奪われ、土に触れ、命を見守っていくことがますます欠かせなくなる。農業の持つもう一つの価値が見直されることになるのであるか。

(農的社會サイエンス研究所代表)